

---

# バカとイレギュラーと奇知外

紫炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとイレギュラーと奇知外

### 【Nコード】

N6047X

### 【作者名】

紫炎

### 【あらすじ】

神崎直人という転生者が『バカとテストと召喚獣』の世界に舞い降りた。彼は坂本雄二らFクラスの面々と共に愉快に高校生活を送っていく……

それだけならよかったのに転生者というイレギュラーを世界は認めなかった。世界はそのイレギュラーを迎えてしまった反動を物語の主人公『吉井明久』に与えた。それによって本来あり得ない人物に出会ってしまった吉井明久はどんな結末を迎えるのか。

これはイレギュラーによって歪んでしまった吉井明久を中心とした

物語である。

この作品では明久は元の性格がありません。非人道的な発言も目立ちます。

## プロローグ（前書き）

最終警告ですが元の吉井明久君はいません。

それでもいいならどうぞ。

## プロローグ

俺の名は神崎直人。俺は今謎の空間にいる。辺り一面真っ白で目の前でじいさんが土下座している。こんな展開を俺は知っている。確か二時小説サイトで読んだ……

「すまん！ わしの管理ミスでおぬしを死なせてしまった！」

そうだ、転生のパターンの一つだ。ということは……

「お詫びにと言ってはなんだがお主を転生させようと思う。どうじや？」

やっぱりか。でもまあ、転生にはあこがれていた部分があるから、是非ともさせてもらおう。

「じゃあ、転生先は『バカとテストと召喚獣』の世界で、能力とかは……」

転生先と付加能力の希望を言っていく中でこれからの生活を思い描いて、俺は楽しみで仕方がなかった。

世界にとって転生者は有害である

それは神の加護によって守られているからだ

その世界の生命の輪廻はその『世界』によって回っている

世界によって生命は調整され、世界によって守られている

神の加護を得た転生者には世界の意志は通用しない

故に障害が生じてしまう

その障害は悪ければ、世界を殺す

故に自己防衛のために世界は『主人公』にその障害を押しつけ、清算する

これが一つのイレギュラーに対する反動である

この世界も例外ではなく

その影響は主人公にもたらされる

1人の少年が公園のブランコに跨って泣いていた。1人寂しく、脇目もふらずに泣いていた。そこに1人の男性が近づく。

「どうしたんだい、君」

その男性はしゃがみ込み、少年に問いかける。すると、少年は泣きつばなしの顔を男性に向けて、

「みんな、僕のこと『バカ』ってよぶの」

と悲鳴を上げるかのように言った。

「『バカ』？」

「うん」

男性は少年の言葉に返事をした。

「お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも、学校の先生も、クラスのみんなも、おじさんも、おばさんも、みんな、みんな、僕のことを『バカ』って言うの」

少年は今まで我慢していたものを吐き出すかのように言葉を続けた。  
「一生懸命がんばっているのに、いつもダメなほうにいつて『バカだ』って言われるの。テストでもいい点取れなくて、お父さんとお母さんに怒られて、お姉ちゃんにも『バカな弟』って言われるの」  
一通り少年が言い終わった後、男性を見て

「どうしてなの、お兄さん？」

目に涙をためて目の前の男性に尋ねてみた。男性は少し悩んで、

「私にはわからないなあ」

と言った。少年は明らかに落胆して「そうなんだ………」と  
呟く。

「ただ………」

男性は少年を興味深そうに見つめて、

「私は君に大変興味を持ったよ」

男性は少年に手を差し伸べて、

「君を『研究』させてくれないか？」

と誘った。

「？ 研究すればわかるの？」

少年は首をかしげて尋ねる。

「ああ、私が説明してみよう」

自信満々に男性は言い放った。少年はその姿に魅了され

「うん！ よろしくね！」

男性の手を握った。

この出会いがこの少年の運命を大きくねじ曲げる。

これがたった1人の少年に興味をそそられた科学者「ジュエル・ス  
カリエツティ」とその科学者に魅了され、親しい人間にバカにされ  
続けた純粹無垢な少年「吉井明久」の出会いであり、この物語の始  
まりである。



## プロローグ（後書き）

この出会いが明久に何をもたらすのか。

転生者にどんな運命が待ち受けるか。

次回をお楽しみください。

第1話・はじまり (前書き)

年月が過ぎ、彼らは文月学園の二度目の春を迎える。

## 第1話：はじまり

季節は春……

文月学園は何度目かの春を迎えた。登校道には桜が咲き、花びらが舞っていた。多くの学生が新たな気持ちで登校していく中、1人だけくるくると歌いながら歩いている生徒が居た。

「~~~~」  
周りの人たちは彼に奇異の視線を寄せるが、寄せられている本人はもともとせずに進んでいた。

「~~~~」  
周りのことなど関係なしに回り歩き、すごく楽しそうに歌っていた。  
「前を見て歩け、吉井」

「~~~~」 おっ、西鉄先生、おっはよ〜ござ〜います」  
正門の前で待ちかまえていた教師に呼び止められ、回るのをやめた。呼び止められた生徒の名は吉井明久。栗色の髪の色をしていて後ろまで伸びている髪を三つ編みにして纏めているのが彼の特徴。しかも、制服の上には白衣を着ていて明らかに風紀違反をしている生徒だ。

「西鉄先生ではない、西村だ。これで何回目だ？」

「392回目ですよ。おめでとうございます、もうすぐ400回目ですね」

「そんなこと数えなくていい。全く」  
ため息を吐きながら西村先生は近くの箱を探り始めた。

この教師の名は西村宗一。文月学園が誇る最終兵器である。というのは誇張表現で、彼は主に補習授業担当の教師である。趣味はトライアスロン、補習は鬼の補習という二つの要素が重なり、主な生徒は彼のことを恐れている。

箱の中から吉井明久と書かれた封筒を取り出して、明久に渡す。

「なんですか、この封筒は？」

「この前の振り分け試験の結果だ。3学期が終わる前に言っていたら？」

「ああ、それですか。興味ないから覚えていませんよ」

「おまえはなあ……」

明久は封筒を開けようとする。そこに西村先生が

「あー、吉井。今だから言うがな、去年一年間のお前を見て、

『こいつはもしかしたらものすごいバカなんじゃないのか』という疑いを持ったんだ」

「それは心外ですよ、西鉄先生　そんなわけないに決まっているでしょ」

封筒の口が取れず、ハサミを取り出して、口を切っていく。

「そうだな、先生が間違っていたよ……」

封筒の口を綺麗に切った後、中身を取り出し確認する。

「吉井、お前の疑いはなくなった」

吉井明久　Fクラス

「お前はとんだ奇知外だ！」

はにゃ？　と疑問詞を浮かべる吉井に西村先生は原因を言う。

「お前、全問題、理解不能な数式をびっしりと埋めていただけじゃないか。そんなんじゃ0点になるのも当然だ」

「そうですか？　あれは回答を数式化しただけですよ？」

「科目一つ一つには、その科目の答え方がある。それに則ってやらなければいくら知識があっても、意味がないぞ」

「世知辛い世の中だなあ」

対して気にも留めた様子もなく、再び明久は歌い回りながら歩いていく。

「あつ、待て！　まだ話は終わってないぞ！」

「~~~~」

西村先生の制止も聞かず、明久は校舎に向かっていく。西村先生は

止めるのを諦めた。

「まあ、Fクラスにはアイツが居るから大丈夫だろう……」  
そろそろ登校時間も終わりかけているのを見て、残っている封筒を  
確認した。その中にある名前を見て本日二度目のため息をついた。

神崎 直人

第1話：はじまり (後書き)

続いてFクラスです。

西村先生が言った『アイツ』とは……………？

## 第2話：Fクラス（前書き）

今回は三人の視点から、話が進みます。

では、ごじぞ。

## 第2話：Fクラス

神崎 side

今年、俺は文月学園で二度目の春を迎えることになる。とうとう原作のスタートだ。普通の奴ならここでAクラスかFクラスを選ぶだろう。だが、俺はそんなことはしない。原作キャラに関わるとロクな目に遭わないからだ。坂本の策略しかり、土屋の盗撮しかり、FF団の嫉妬攻撃と痛い目にしか遭わない。去年は同じクラスだったため、どうしても仲良くなるしかなかったが、体験してみ分かった。

凡人が過ごすような日々じゃない。特に吉井明久！ どういう訳かキャラが改変している。それも悪い方向に。何度、あいつに関わりたくないと思っただか。

一年間アイツらに付き合っただ俺を、ほめてやりたいと思ったぐらいだ。だから、今回はEクラスあたりを狙って、振り分け試験に臨んだ。手応えではいい感じだと思う。その安心のせいで、

「神崎！ 遅刻だぞ！」

遅刻したわけだが。

「おはようございます、西村先生」

「おはよう、神崎。それと一言足りないぞ」

一言足りない？ ああ、そうか。

「今日も朝から暑苦しいですね」

「遅刻の謝罪もできんのか、お前は」

うん？ そっちだったか。

「まあいい。ほれ」

西村先生が箱の方に手を伸ばし、封筒を掴んで、俺に渡してきた。とうとう来たなこの時が。俺はにわかに緊張する。

「あー、神崎。今だから言うがな、俺は去年一年間のお前を見て、『もしかしたらコイツバカなんじゃないか』という疑いを持ったん



だ……」

「それは大いなる間違いですよ、西村先生」

封筒の口が取れにくくて悪戦苦闘する。くそっ、これぐらい……。

「そうだな、今回の振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気付いたよ……」

「そう思ってくれるなら、嬉しいです」

こうなったら、破いて開けるか。

「喜べ、神崎。お前への疑いは消えた……」

封筒を破いて、中の紙を取り出す。さて、俺のクラスは……

「お前は大馬鹿者だ！」

神崎 直人 Fクラス

「そんなバカな……！」

俺の最低クラスの生活が始まった。

明久 side

「おや、これがFクラスの外見か。ひどいねえ」

歌いながら回り歩いていたら、いつの間にかFクラスに到達した。

まず最初に目に付くのは、表札がダンボールで出来ているところ、壁が割れているところだ。長い間、放置されていたんだね

別にどうでも良かったので、教室に入ることにする。

「やあやあ、みんな。おはよう モ「言わせねえぞ、明久！」」

誰だよ？ 人の言葉に被せてきたのは。声の方を見ると、

「おや、坂下君じゃないか おっはよう」

「ああ、おはよう。それと俺は坂本だ。何回目だ、この会話」

「今ので2992回目だね おめでと〜 もうすぐ3000回目だよ」

「そんなこと数えなくていい。暇人か、お前は」  
思った通り、坂下君ではないか　　僕の…一号  
「坂下君が教壇にいるということは、君が代表？」  
「坂本な。ああ、そうだ。俺がこのクラスの代表だ」  
なるほど、なるほど。つまり、このクラスは坂下君の意のままに動くと言っことか。じゃあ、今後のプランは大幅に変更だね  
「席は自由だつてよ」  
「じゃあ、僕は隅っこに座らしてもらおうよ」  
楽しみだなあ、このクラスにはとてもいい“素材”が揃ってそうだからね」

## 雄二 side

相変わらずだな、アイツは。

「雄二よ。お主は吉井と親しいのかのお？」

疑問を浮かべながら、一年の時から親友、秀吉が話しかけてきた。

「まあ、親しいっちゃあ、親しいな」

「よく付き合えるの、吉井と」

心底不思議そうな顔をして、秀吉が言う。まあ、当然か。

明久は高校一年の自己紹介の時に、余りにもぶっ飛んだ紹介と後の奇行で、寄ってくる奴は居なかつたし、自分の興味を持ったことしかし、関心を寄せなかつたからな。

そのせいで、友達なんて出来やしないし、文月学園『友達にしたいくないランキング』上位ベスト3入りしたからな。同級生だった奴らも薄気味悪がっていたから、余計にな。

「……正直、坂本の懐の大きさに感服する」

「そうじゃの。雄二よ、何かあつたら、相談するのじゃぞ」  
懐が大きいか……

「そんなんじゃねえよ……」

そんなんじゃないやねえーだ。アイツと俺の関係は……

昔を思い出し、少し鬱になるが、もうすぐ来るであろう“バカ”を  
考えて、思考を切り替えた。と同時に

「すいませ〜ん、遅れました」

とバカっぽい声が聞こえてきたので、俺は“バカ”で憂さを晴らしを  
する。

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

## 第2話：Fクラス（後書き）

どうでしたか？

雄二はこの小説の明久を知る上で、鍵となります。

今後の展開をどうやっていくか少し悩むところですが、ちゃんとした展開にしていこうと思います。

どうぞ、ご期待を

### 第3話：自己紹介（前書き）

今回は明久の爆弾発言。というよりこれを書きたかった。

### 第3話：自己紹介

神崎 side

「うわあ、なんだこれは……」

鉄人こと西村先生にクラス分けの封筒をもらった俺は、今Fクラスの前に立っていた。そこで見た光景はライトノベルで読むよりもすごかった。表札がダンボールって……

「これが格差社会なんだな……」

先ほど見たAクラスと比べての落差が大きすぎて、嫌になる。だが、落ち込んでいてもしょうがない。いざ、Fクラス！俺は気持ちを切り替えて、新しい一歩を踏み出した。

「すいませ〜ん 遅れました」

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

最悪だあ！ 入って早々罵倒されるとは！ いや、待て神崎直人。もしかしたら聞き間違いかも知れない。

「聞こえないのか、アアン？」

聞き間違いじゃない。誰だと思い、声の方向を向いたら、

「……何やつているんだ、雄二」

「先生が来ないから教壇に立ってみた」

雄二が教壇に立っていた。そうか先ほどの罵倒は雄二だったのか。それなら理解できる。

「つか、何で教壇にいるんだよ」

「俺はクラス代表だからな。全員の顔を見回していたんだ」

「雄二が代表？」

「つまり、ここの奴らは全員俺の駒だ」

あくどい笑みを浮かべて俺を見る雄二。なるほど、原作通りなんだな、そこは。

「すみません、通してもらいますか？」

俺が雄二に話しかけようとしたとき、先生らしき人物が入ってきた。

この人が担任か。

「先生、席順はどうなっているんですか？」

「決まってるないので、ご自由にどうぞ」

「決まってるのかよ!？」

手抜き過ぎだろ!？ 大丈夫か、このクラス!？

## 雄二 side

HRが始まり、自己紹介に入る。ここの設備は散々なものだが、俺が考えるプランには丁度いい状態だ。あとはどのタイミングで仕掛けるか。

「すう」

俺の隣で寝息を立てながら寝ている明久を見た。コイツが協力してくれば絶対に勝利は間違いないような気はするが、どうやってコイツを動かすか……。しょうがない、あの手で行くか。大体のプランをまとめて、どんな演説をしようか考えているとき、

「あ、あいつ。遅れてすみません……」

姫路瑞希が入ってきた。そういえば直人(バカ)が姫路について何か言っていたな。それが。

紹介が終わり、こちらに逃げるように来て、座った。後々のために話しかけとくか。

「ひめ「姫路」」

んっ？ 今なんか聞こえたような……まあ、いいか。

「代表の坂本だ。よろしくな。」

「は、はい。よろしくお願ひします」

挨拶も終わり、そういえばと気になることを聞いた。

「体調は大丈夫なのか？ 試験の時に体調を崩したと聞いたが……」

「あつ、俺も聞きたい」

「か、神崎君!？」

直人が話しかけてきた瞬間、姫路は大いに驚いていた。ああ、なるほど。

「姫路、直人がブサイクですまない」

直人に変わり、俺が謝罪しておいた。直人が何か言っているが無視だ、無視。

「そ、そんなこと、ありませんよ。顔は整っているし、目も開いていて……」

姫路が褒めるが、直人が褒められるのは気に入らん。

「確かに見てくれは悪くないかも知れないな。俺の知り合いも興味があるという奴も居たし」

「えっ、それって「それって誰ですか！」うおっ!？」

「確か、久保……」

よし、いい具合に食いついているな。ここで落としてやるか。

「利光だったか」

久保利光 (男)

直人が落ち込んでいるのを見て、満足した俺はフォローをしてやることにした。

「安心しろ直人。半分冗談だ」

「待て、雄二。半分ってどういう事だ」

「そうですか、「冗談ですか」

「ああ」

「雄二、半分ってどういう事だ!」

「こらこらそこ、騒がしいですよ」

「あ、すみません。せんせ……」

ゴシヤァー……

騒がしくなった俺たちを注意するために、教壇をたたいた教師だったが、たたいた瞬間、音を立てて崩れ去った。

「……えー、替えを持ってくるので少々待っていてください」

教師が新しい教壇を取ってくるために教室を出た。

「……なあ、雄二。ちょっといいか」



「うん？ 何だ」

「ごじゃあ、話にくいからちよつと外で」

そう言つて、直人は俺を廊下に連れ出した。何だ、一体？

明久 side

「ふあ~~~~……」

丁度朝寝から目が覚めた。今後のプランの設計も終えたしね。楽しみだなあ

「吉井君、君の番ですよ」

おりよ？ もしかして自己紹介なのかな？ そうだ、みんなに言わなくちゃならないことがあるんだ。坂下君が「余計なことを言うなよ」みたいな視線を送る。大丈夫だよ 変な事なんて言わないから。みんなを見て、僕は自己紹介を始めた。

「おはよう、実験体（モルモット）諸君 今日からみんなの体で実験と研究をしていくから、目立たないモブキャラのごとく、僕の実験台になつてね よろしくおねがい、ね」

僕は特上の笑顔で言い切つた。あれ、何でみんな凍り付いたような表情をしているの？

### 第3話：自己紹介（後書き）

これを受けてのみんなの反応はいかに・・・・・・・・？

次回をお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6047x/>

---

バカとイレギュラーと奇知外

2011年10月21日09時00分発行